

ダルニー通信

73
2014
春号

特集

奨学生の選考



- 児玉伸子さんの『ラオス国の勲章を頂戴して』
- 轆田隆史氏の連載エッセイ 第4回(最終回)

奨学生の選考について

一般財団法人 民際センター 秋尾晃正

メコン5ヶ国は一概に一括りにはできない多様性のある地域です。小乗仏教国としての共通点はありますか、社会主義国家、経済発展した国、最貧国があり、植民地化、戦争、紛争などの歴史を経験した、正に多様性をもった地域です。

ダルニー通信70号から、マクロ的なアプローチで中学校の教育費の比較、中学校教育の現状、中学未就学・中退の理由を記事にしました。今回は奨学生の選考過程に焦点を当ててみました。

殆どの外国や民間の奨学生団体は教育行政機構との連携はなく、独自で奨学生に奨学生を提供しています。ダルニー奨学生は、民際センターの各事務所が当初から各国の教育省、県・郡教育局・委員会と相談・協働しながら、各学校に一人いるダルニー奨学生担当の先生（ガイダンス・ティーチャー=guidance teacher）が中心となって選考・奨学生提供・（各事務所への）奨学生情報の提供などの運営を行います。そのため、生徒

の家庭事情等の把握が容易で、かつ奨学生の選考をするための入件費が節約できます。

タイでは昨年から東北地方のすべての中学校がインターネットで生徒情報をタイ事務局に送ることができますようになりました。他の国々でも近い将来、農村部でも携帯やインターネットの普及が急速に進み、インターネットのアクセスが可能な学校が増えると想像できます。ドナーと奨学生がインターネットを通して対話をする時代もそう遠くないと思います。

ちょっと先走りしすぎましたが、科学の発展には目を見張るものがあるとはいえ、依然として貧富の格差は大きく、基礎教育を終了できない子どもたちが存在します。豊かな社会で生活する私たちがメコン5ヶ国の子どもたちを身近に感じ、支援を続けていただければ幸いです。日頃は目に見えませんが、各学校に勤務する数千人のガイダンス・ティーチャーは私たちの思いを伝えてくれる伝道師で、最前線で活躍しています。

■■各国の奨学生選考過程とその基準■■



選考項目は6つ。月収は30~50ドルが目安



ヨエ・グワ中学校

昨年からスタートしたミャンマーの奨学生は現在140人。選考過程は次のとおりです。まず、日本からミャンマー事務所 (EDFミャンマー) に来年度の奨学生提供口数の連絡があります。それを受け、ミャンマー事務局は奨学生を提供する学校のある町／市の教育局にコンタクトをとり、奨学生を提供する学校に奨学生口数を割り振ります。割り振られた学校の校長先生や担当の先生が町／市の担当者と相談して奨学生を推薦します。選考する際に考慮する項目は以下のとおりです。

- ①家族の状況（両親がいるのか、収入はいくらあるのか、等。収入は月30~40ドルが目安）
- ②きょうだいの数と彼らの就学状況
- ③小学生時の勉強に対する姿勢

- ④志願者の将来の希望
 - ⑤通学距離（距離が長いと通い続けることができず、ドロップアウトする可能性が大きい。）
 - ⑥健康状態（例えば感染症にかかっていないかどうか）
- これらの状況を総合的に判断して奨学生を決め、申込書と写真をミャンマー事務局に送ります。ミャンマー事務局はそれを確認して決定します。

ヨエ・グワ中学校はヤンゴン地区の西、ハタンプトンにある中学校で、首都ヤンゴン市から37キロの地点にあります。小学校と併設で2013年度の小学生数104名、中学生数181名です。ダルニー奨学生数は9名（男子3名、女子6名）です。

奨学生の1人、キンは中1で、7歳の時に両親が亡くなり、現在、結婚している30歳のお姉さんのところで暮らし

らしています（お姉さんは小4で小学校を中退）。キンには3人のお兄さんがいますが、3人とも生活が苦しく、キンの学費を工面することはできません。弟はお

寺にあずかってもらっています。こうした家族状況ですが、将来は先生になりたいと思い、必死で学校に通っています。



キン(左)と別の奨学生。右はス工先生。

同校のダルニー奨学金担当 ス工先生のコメント

「ハタンプトンの町は首都ヤンゴンからそれほど遠くありませんが、発展から取り残されています。住民の多くは農家ですが、農閑期には収入がなくなります。工業団地が近い村は月50～80ドルの収入を得ることができます、それは一部の人たちです。経済的に貧しいため、子どもを中学校に通わせることができない親もい

ます。特にきょうだいが多い場合はそうです。私が勤務するヨエ・グワ中学校への就学を断念する子も少なくありません。今年度は9名の生徒が奨学金をもらっています。心から感謝しております。しかし、奨学金があれば中学校に通える子が他にもまだ大勢います。もっと奨学金を送っていただけるとありがたいです」

**2014年度ミャンマー奨学金は
140口を目指していますが、
12月末現在で56口しか集まっていません。
皆様のさらなるご支援をよろしくお願いします。**

**2014年度タイ・
ミャンマー奨学金の
締め切りは
3月20日です。**

タイ

選考基準は3つ。選考後、先生は家庭訪問も



タイは1988年から奨学金事業を行っており、県や郡の教育局と確固としたネットワークを築いています。日本及びタイで支援している奨学生数は現在、約14,000人です。奨学金選考過程は以下のとおりです。

1月：タイ事務局（EDFタイ）の担当スタッフが東北地方の各県に行き、

事業が円滑に行われるよう担当の先生向けに説明会を開き、奨学金制度の目的、選考基準、そのプロセスについて説明します。先生の異動が頻繁なので、この説明会は毎年行われます。

この後、小6の生徒に対して募集を行います。応募者に対して先生が家庭訪問をして、奨学金を提供する条件に満たしているかどうかを調査し（その時に写真も撮り）、その後で奨学生を選考します。そして各学校は申し込み用紙から得たデータをタイ事務局に送ります。タイ事務局ではデータをコンピュータに入力し、コンピュータが自動チェックした後、担当者が無作為に選んだ奨学生のデータをチェックして奨学生を決定します。



選考基準は以下の3つです。①来年度、中1に就学予定の(現在)小6の生徒 ②経済的に恵まれていない生徒で勉強にやる気があり、真面目。かつ親が中学就学に同意している生徒(1バーツ=3円で計算すると家族の年収が約15万円以下) ③親が公務員の場合は対象外。

コーンケーン県のバン・ノン・ヒン中学校は生徒数

263名の小さな規模の中学校です。2013年度は4名の生徒がダルニー奨学生を提供されています。その1人、ナッタポン・ブッパー(写真前ページ左下)は現在中1の生徒で、両親は離婚し、祖母と妹の3人暮らし。両親は子どもを祖母に預けて他県に行ってしまい、それ以来、子どもと一切関わろうとはしません。祖母は家事労働などの仕事をして月約7,000円の収入しかありません。ナッタポンは平日は家事、週末は農作業などの仕事を見つけて少しでも家計を助けています。中学を終えたら高校にも行き、安定して仕事を見つけて、将来は祖母、妹と安定した生活を送り、さらに可能なら、彼女と同じような境遇にある人にも何かをしたいと思っています。

同校のダルニー奨学生担当 ウイチュダ先生のコメント

「まず支援者の皆さんに心よりお礼を言いたいです。奨学生は経済的に恵まれない子どもたちが知識を得、それが良い仕事を得ることにつながり、将来、生活を向上させていくチャンスを提供します。もし可能なら、大学まで支援していただけると、彼らの可能性はもっと

と広がります。日本の支援者の皆さんはとても親切であるということ、それから経済的に恵まれない子どもたちにとってどれほど教育が重要かということを知っているので、外国の子たちにも支援をしてくださるのでしょう。本当に心からお礼を申し上げます」

カンボジア

応募者は皆、同様に貧しい

2007年からコンポンチュナン県でスタートしたカンボジアの奨学生は現在約1,600人。対象県は4県に増え、奨学生を申し込む生徒は増加しています。

奨学生の選考は6月頃から始まります。まず奨学生を申し込む小6の生徒の応募を小学校に通知します。応募する生徒は応募用紙を書き、それを参考に以下の①～⑥を基準として先生と校長先生が郡や村の教育担当者と相談して奨学生を選びます。選考をする際、①の経済的な貧しさが重視されますが、応募する生徒の家庭は皆同じように貧しいので、②以下の項目も必要になります(「どうしてあの家の子が選ばれて、うちの子が選ばれないのか」といった苦情が時々耳に入ります)。①家庭の収入(カンボジア事務所では特に収入ラインを設定していませんが、\$1.25／日が貧困ラインです)②家族(特にきょうだい数)③勉強に対する意欲④成績⑤健康状態⑥通学距離。カンポット県にあるトラペーング中学校は全校生徒数328人で、ダルニー奨学

生は24名です。同校の奨学生のソック(写真右)は現在、中3。中学入学時、家族に経済的余裕がなく、卒業はできないだろうと思っていたそうです。「だから、奨学生の募集を聞いたとき、喜んで応募しました。奨学生がなかったら、僕は中3まで進級することができなかつたと思います。将来は公務員になって貧しい人々を助けるのが夢だそうですが、それに高校を卒業しなければなりません。ソックの前途はまだまだ容易ではありません。



世界の友人を ご紹介ください



同校のダルニー奨学金担当
ソアン先生のコメント



「ダルニー奨学金は経済的に貧しい子どもたちに教育機会を提供する上で大きな貢献をしています。中学校への就学率を上げ、卒業まで学校に通うエネルギーを生徒に与えています。いつしか、それが貧困を削減することになると思います。他国の子どもにこうした機会を提供していただいて、生徒に代わって心よりお礼をしたいと思います。ありがとうございます。彼らの将来のためにも、これからもぜひ支援を続けてください」



ラオス

応募した生徒を無作為に選んで訪問

ラオスの奨学生はピーク時には7,000名を超えていましたが、現在は約5,000名です。

奨学金の選考過程は以下のとおりです。毎年2～4月にラオス事務局の奨学金担当スタッフが奨学金を提供している4つの県を訪問し、学校の担当の先生（guidance teacher）や県・郡教育局の担当者と打ち合わせをし、奨学金の目的や選考過程などを説明します。各学校に奨学金数が振り分けられ、その数に応じて校長先生や担当の先生、郡の教育担当者などが選考委員会を作り、奨学生を選びます。担当の先生が生徒の経済状況や成績等を知っているので、選考の中心になります。選考基準は①家庭の経済状況（年収9,500円以下）②教育の重要性に対する親の理解度③勉強に対する意欲などです。選考委員会で選ばれた生徒の情報がラオス事務局に送られ、それをデータベース化します。そして、ラオス事務局スタッフが年に2～3回、現地を訪問し、無作為に選んだ生徒の家庭を訪問してインタビューなどをし、家具や家電製品の有無を調べて生徒の家庭の経済状況をチェックします。その訪問の後で最終的に奨学金受給者が確定します。

サワンナケート県にあるヤンカム中学校の全校生徒は296名、奨学生は9名です。リントンは中1で14歳（写真右。右隣りはお母さん）。両親は離婚し、母親はほ

とんど1人で9人の子どもを育てました。リントンは8番目。5人は家を出て、うち3人は結婚していますが、みな経済的に苦しい生活を送っています。農業の日雇い労働をしているお母さんの日給は約340円で、しかも農閑期には仕事はありません。それでリントンは、少しでも家族の収入を得ようとお母さんを手伝うため、学校を休む日が少なくありません。勉強をする意欲はあるものの、しばしば学校を休むため、中学校に就学する見込みが小さいリントンを見て、先生は彼に奨学金の応募を持ちかけました。そして無事、奨学金をもらって中学生に。警察官になるという夢も諦めないでみました。



2014年1月1日に待望のEDF-Internationalのウェップページ（英語版）が完成しました。どこの国に住もうが、世界の人がインターネットでアクセスして、クレジットカードで奨学金などの事業を支援できる制度が確立しました。そして生徒のデータや写真はメールで報告（英語）されます。例えば、外国に住む友人に「私は日本のEDF-Japan（民際センターの英語名）を通して、メコン5ヶ国の内、経済的に恵まれない1人の中学生の奨学金を提供しております。この度、あなたが住む国からでも、直接<http://www.edf-international.org/>にアクセスし、協力ができます。ぜひ、一緒にメコンの子どもたちの支援をしませんか」と友人にメールを送ってください。日本生まれの日本の教育支援団体の運動が世界に広がればと念願しています。



同校のダルニー奨学金担当
オドウサ先生のコメント

「リントンはもともと勉強のできる生徒でしたが、奨学金のおかげで学校の出席数が増え、成績も向上しました。勉強以外の課外活動にも参加し、友達と遊ぶ時間もあるようです。支援をされた方に感謝しています。ただ、リントンのような生徒はまだたくさんいます。厚かましいですが、もっともっと支援をしていただければと思います」



同県内で収入格差は6倍以上

ベトナム奨学金も昨年スタートしたばかりで、現在、奨学生は210人程度です。奨学金を提供しているドンナイ県の貧富の格差は信じられないほどです。工業団地があるビエンホア地区（ホーチミン市から35km）の年収は国の平均の800ドルとほぼ同じぐらいです。一方、農村部のディンクワン地区は90%は少数民族で、平均年収は120ドル程度です。

奨学金の選考過程は以下のとおりです。

- ①奨学金の募集内容について郡教育局などに連絡し、募集要項を送ります。
- ②郡教育局が小学校に募集要項を送ります。
- ③応募する生徒は、役所から「貧困家庭」の証明書をも

らい、奨学金申込用紙と一緒に就学希望の中学校に提出します。

- ④申込用紙等を受け取った中学校は関係機関と協議し、審査結果を書き加えて郡教育局に送ります。

- ⑤郡教育局はそれをチェックしてベトナム事務局(EDFベトナム)に送ります。

- ⑥ベトナム事務

局は、申込用紙を見比べ、両親の有無、障がいや戦争の後遺症の有無（障がいや後遺症のある人は優先されます）、家族の中で字を読めない人がいるかいないか、などを勘案しながら決定し、本人、中学校、及び郡教育局に通知します。

ディンクワン地区にあるングエン・トライ小学校は全校生徒700名のうち300名が貧困家庭。同校に通う小6のハオ（写真左下）の両親は字が読めません。ハオは奨学金がないと中学校に就学できませんでした。ベトナム事務局のスタッフがハオの家を訪問した際、ハオは泣いて訴えました。「どうして貧しいと中学校に行けないの？」2ヶ月後、奨学金の受給が決まってハオは嬉しそうでした。ハオの先生（写真右上）はハオの様子を見てこう言いました。「ディンクワン地区はホーチミン市から35kmで、それほど離れていないにもかかわらず、村はアクセスしにくい位置にあります。ですから、教育レベルが低い子どもたちが大勢いるのに、教育支援をしてくれる地元・国際NGOは皆無に近いのです。そんな状況ですから、ダルニー奨学金は本当に嬉しい。ハオのような子どもの未来が開けます。願わくば、もっともっと支援がほしいです」



新しく開始する ラオス中学校校舎建設への思い

一般財団法人 民際センター
理事長 秋尾晃正

民際センターでは、2013年末現在で35校の校舎を建設してきました。すべて小学校の校舎です。この校舎建設事業は、国際機関、政府機関、他のNGOの建設事業とどこが違うのでしょうか。

物事の発展の仕方は変化→変容→変革するという考えがあります。この考えに即して、ラオスにおける校舎建設の影響を考えると、他と比較して予算規模の小さな私たち日本の一市民団体が建設する校舎や教室がまず「変化」を創造する「光」を持つこと。その「光」とはラオスの教育の発展を促すモデルづくりです。そのモデルが成功すれば、第二、第三のモデルができ、それが普及することで、教育の「変容」が促進され、10年経れば、それが普通になり、ラオスの教育の「変革」に貢献するはずです。

日本とラオスの学校数を比較すると、日本では小学校が22,000校、ラオスが8,902校、中学校は日本が10,815校でラオスが844校（ラオスの小学校は5年制で中学校は4年制）です。日本は2対1に対してラオスは約10対1。この数字は中学校と中学校教師の数が圧倒的に足りない事実を物語っています。県庁や郡庁所在地には中学校がありますが、中心部から離れると中学校はありません。

このような現状ですから、近い将来、中学校校舎の建設を実施したいと思っています。中学校校舎建設に関して、既に決まったことと私の期待は以下の2つです。

（1）ラオス事務局（EDFラオス）は対象県で公募をし、村々の教育委員会、父兄や小学校の教師等が中心となり、中学校建設を自分たちの地域の建設を希望する運動を地域で醸成し、校舎建設地の調整や住民参加型学校建設を展開する。すでに教育省の内諾を得、新校舎には優秀な中学教師を派遣することが約束された。郡部に中学校設置方法の「変化」を創る礎になることを期待する。

（2）既存の小学校に1教室を増設し、中学校1年のクラスを形成する事例作りに対してすでに教育省は内諾した。圧倒的に中学校教師が不足しているが、教師育成には年月がかかる。もし1教室を増設すれば、中1のクラスに対して小学校の先生が中学生を教えることができる特例を教育省は内諾した。その学校にも優秀な教師を派遣することを約束した。この特例が100校で実施すれば特例でなく、制度として確立するであろう。

建築家の加藤隆久氏に新規の中学校の設計図もお願いしており、完成が近いと聞いています。2014年には是非とも始動したい事業です。ご関心のある方はご連絡ください。

古いふるい歴史の共有

ベトナムへは、あのアメリカとの戦争がようやく終わろうとしていたころをはじめ何度も足を運びました。

交通標識にローマ字で「チュウイ」と書いてあるのに気がついたとき、ああ、この国もかつては日本と同じ漢字の文化だったのだなあ、と思ったものです。

「チュウイ」は「注意」なんです。この国もかつては中国から来た漢字を用いていたのですが、19世紀にフランスの植民地にされて、「クオク・グ（国語）」がローマ字化されて今日に至りますが、漢字の「読み」がそのままたくさん残っているのです。

天の原 ふりさけ見れば 春日なる三笠の山に 出でし月かも、という「百人一首」の和歌を、年配のみなさんなら覚えているかたも多いでしょう。阿倍仲麻呂（あべのなかまろ）という、いまから1300年も昔の人の歌です。

この人は奈良から中国の古代国家「唐」に勉強に行った留学生でした。とても優秀だったので皇帝に大切にされて役人になりました。帰国しようとしたが海難のためベトナムに流れきました。そのころ故郷の奈良の三笠山をなつかしんで詠んだのがこの歌でした。いまごろ三笠山には美しい月がのぼっているだろうなあ！

ふたたび唐の都にもどった仲麻呂は皇帝に安南（ベトナム）の知事に任命されてベトナムに赴任しました。このとき山岳地帯の部族が反乱をおこしました。唐ふうに朝衛（ちょうこう）と名乗っていた仲麻呂が、これを平らげたという記録がベトナムに残っているそうです。（小倉貞夫『物語 ベトナムの歴史 一億人国家のダイナミズム』中公新書）

このように、ベトナムにかぎらず東南アジアの国々とわたしたちは、古いふるい関係と歴史を共有しているのです。わたしたちは、そのことをもっともっと学ばなければならないのです。

そこから、この地域の皆さんとわたしたちの新しい歴史がはじまるのです。

轡田 隆史



轡田（くつわだ） 隆史 氏

1936年東京生まれ。元朝日新聞論説委員。欧米・東南アジア・中国・中東などを歴訪。元・テレビ解説者。NHK/FMラジオ「日曜喫茶室」に出演中。日本記者クラブ、日本ペンクラブ、日本エッセイスト・クラブに所属。著書に『「考える力」をつくる本』など。

ラオス支援の功績に対してラオス政府から勲章を受賞

「ラオス国の勲章を頂戴して」

児玉伸子

10月1日にラオス国の勲章を頂戴しました。

今年の5月ころにミンサイのスタッフから連絡をもらいましたが、当時は実感も無く他人事のような感じでした。しかし、東京のラオス大使館で駐日ラオス大使より正式に拝領すると、結構晴れがましい気分となりました。

"人間は教育を受けることで、文明人になる第一歩を踏み出す"と、中根千枝先生は書かれていました。文字を使いこなすことで、他人の経験を自分のものにし、文化の伝承が容易になっていきます。私自身は教育について恵まれた環境で育つことができ、とても感謝しています。一方、教育を受ける機会に恵まれず、第一歩を踏み出せない子供がいることは、とても残念なことです。私のささやかなお手伝いによって、ひとりでも多くの子供達が教育を受けることができれば、私自身にとってもとても嬉しいことです。さらに今回の叙勲によってラオス国から公式に認めていただき、大いに晴れがましくそしてちょっと照れくさく感じています。

私とラオス国との関わりは、同じ市内で開業されている木村嶺子先生のご縁から始まりました。10年ほど前に私が祖父の遺産の用途について思案した時、以前に木村先生が"ラオスに学校を建設する"というお話をされていたことを思い出しました。その時彼女が「男性はお金が出来ると車を買い替えたりするけれど、車を運転しない私は学校を作りました」と、言われたことがずっと私の心の底に残っていたのです。その後、余裕のある範囲で少しずつラオス国への援助を続けてきました。

私が幼かったころ祖父は孫に向かって、「社会に出てお金を稼ぐことはとても大変なことだ。しかしそれを如何に使うかはもっと難しいことだ。お金の使い方でその人の品性が現れる」と、諭していました。いずれあの世で祖父に会った時、少しは褒めてもらえるかなと、秘かな楽しみにしております。

ラオス大使館で謝恩パーティ開催

5月16日(金)夕方、ラオス大使館で 支援者謝恩パーティを開催します

以下の内容を予定しています。

- ラオスから事務局長のカムヒアとフェンが来日してラオスの教育事情を報告します。
- その場でラオス奨学生とインターネットで話をします。
- 奨学生の生活を紹介するビデオを上映します。
- ラオス大使館が腕によりをかけてラオス料理を作ります（ビュッフェ形式）

時間・参加費など詳細は未定です。ご関心のある方は民際センター事務局（TEL：03-6457-5782）にお問い合わせください。



左から建築家の加藤さん、一人おいて理事長の秋尾、児玉さん
ケントン大使

民際センターの 年間スケジュール

- 5月：ラオス大使館で謝恩パーティ
- 9月：H.I.S. ラオス旅行
- 10月：日比谷でグローバルフェスタ
- 11月：ポントン村美術部プロジェクト
：ドナー連絡会全国大会
- 1月：事務所で新年会
- 3月：H.I.S. ラオス旅行

〈民際センターが実施しているプロジェクト一覧〉

本紙上でこれまで単発に紹介してきたプロジェクトを、比べやすいうように一覧にまとめました。

1. どなたでも常時 支援可能なプロジェクト

プロジェクト	対象国	支援対象校 対象者	内容
OSOP (1校1事業) =One School One Project	タイ	中学校	村の将来の自立に向けて、生徒たちが学校単位で地域の技術や資源の活用を学んでいます。それをサポートし、学校が自立て事業を実施できるような支援を行うプロジェクトです。
教育支援セット (教材セット・スポーツ用具セット)	タイ・ラオス	中学生	タイやラオスの農村部の学校では、基本的な教材やスポーツ用具が不足しています。その不足している品物を贈ろうというプロジェクトです。
木箱入り図書セット	ラオス	小学校	ご支援者の名前入り木箱に入った約100冊のラオス語の本を小学校に寄贈します。
少数民族教師養成	ラオス	少数民族の高校卒業生	P12参照
ラオス学校建設	ラオス	小・中学校	校舎の量的不足・質的劣悪さを解消するラオスの土と木で造る環境に優しい快適な校舎を建てるプロジェクトです。
ラオス図書館建設	ラオス	中学校	本屋がない農村部に図書館を建てて、図書に親しんでもらうためのプロジェクトです。
ラオス人教師修士留学事業	ラオス	教師	ラオスの教育水準向上のため、ラオス人教師がタイの大学の修士課程へ留学するのを支援し、将来を担う人材を育成するプロジェクトです。
研修旅行	ラオス	小学校・中学校	農村部の学校・生徒事情を視察します。
ポントゥン村美術部プロジェクト	ラオス	小学校・中学校	アーティストの日比野克彦氏(東京藝術大学教授)の協力を得て、ラオスの子どもたちにアートを経験する機会をつくろうというプロジェクトです。
自然災害における緊急支援	タイ ラオス カンボジア ベトナム ミャンマー	乳幼児～小学生	大地震や津波、洪水等の自然災害が生じた緊急時に、被災地の子どもが必要な救援物資を迅速に提供します。

2. どなたでも、特定の時期のみ 支援可能なプロジェクト

自然災害における復興支援	タイ ラオス カンボジア ベトナム ミャンマー	小学校・中学校	学校の倒壊、損壊に必要な工事、修繕等の復興支援を行います。
自然災害におけるお見舞い支援	タイ ラオス カンボジア ベトナム ミャンマー	小学生・中学生	被災地の学校、子どもたちに少しでも今までと同じように生活できるよう、お見舞いセットを提供します。

3. タイ、ラオスへの奨学生支援を行っているご支援者のみ 常時 支援可能なプロジェクト

プレゼントセット	タイ・ラオス	中学生	ダルニー奨学生には含まれない、学習教材をプレゼントとしてさらに奨学生を応援するプロジェクトです。
----------	--------	-----	--

*詳細は、民際センターホームページ、または事務局までお問い合わせください。

年1,000円で民際センターのサポーターに。

民際力寄付は、年1,000円～の支援（1回のみの支援、継続支援、どちらも可能です）で、すべての子どもたちが夢や希望を持って学校に通い、教育を受けることができるような社会作りを目指す民際センターの活動をサポートするプログラムです。



一般財団法人
民際センター

事務局活用リスト

事務局ではさまざまな資料やサービスを用意して、ドナーの皆様のお問い合わせやご要望にお応えしています。

※ご利用につきましては、以下の要領でご連絡願います。

地域で奨学生や図書セットを広める活動をしたい

- ①書き損じハガキ・未使用テレカの収集
- ②使用済みインクカートリッジの収集
- ③パンフレットまたはリーフレットの設置
- ④不要な本を集めてブックオフに送る
- ⑤募金箱を設置したい

お気軽にお電話またはメールでお問い合わせください。折り返し資料などをお送りします。また、ホームページでも紹介しておりますので是非ご覧ください。

奨学生や現地のビデオを見たい

DVDは現地情報満載の広報ビデオ(13分)。パネルを貸し出すこともができます。送料は負担願います。

個人でタイを訪問し、奨学生に会いたい

80円切手を貼った返信用の封筒をお送りください(メール可)。折り返し、資料をお送りします(3~5月と10月、学校はお休みのため訪問できません)。

タイの奨学生と文通したい

- ①手紙の翻訳
- ②タイの切手購入

- ①:タイ語→日本語に翻訳します。手紙の原本と80円切手4枚を同封して送ってください。
- ②:タイ切手セット(12回分1000円)の代金は郵便定額小為替か現金でお願いします。
80円切手を貼った返信用の封筒も同封してください。

※奨学生の氏名をカタカナで読みたい方は、電話、メール、ファックスでお問い合わせ下さい。

民際事務局でボランティアをしたい

PC入力、DTP経験者、事務作業など。電話またはメールで担当、窓口までお問い合わせください。

奨学生の説明を聞きたい

事務局では随時無料説明会を行っています。参加希望の方は必ずご予約ください。

毎年忘れずに送金したい

お申し込みいただければ、銀行自動引落申込書をご送付いたします。

編集後記

昨年11月、2つの旅行の随行でラオスの3つの村に滞在しました。どの村もこれまで数回訪れており、村に到着すると、一列に並んだ生徒と一緒に、村人や先生ら見覚えのある顔が出迎えてくれます。翌朝、暗いうちから鶏が鳴き始め、やがて村人が朝食を準備する音などが聞こえてきます。村の中央の道をオートバイが走り、子どもたちが三々五々学校へ歩き、牛が道草を食いながら田んぼに向かいます。いつもと変わらない、ゆっくりと時間が流れる村の風景。旅行が終わり、日本に帰ってから時々、彼らの生活を思い浮かべます。満員電車に揺られたり、職場で残業をしたりしている今、この瞬間に、日本から約4,000キロ離れたラオスの村で家族とご飯を食べたり、弟・妹の世話をしている誰彼の顔を思い浮かべると、なんだかホッとします。学校に通っている子どもたちには心の中でつい声援を送ってしまいます。そんな想像をすることが、生活をするエネルギーのつかの間の充電になっています。(富)



一般財団法人
民際センター

ダルニー通信 第73号 2014年3月1日発行 発行人: 秋尾晃正
一般財団法人民際センター 〒162-0801 東京都新宿区山吹町337 江戸川橋東誠ビル5F
TEL: 03-6457-5782 FAX: 03-6457-5783
Eメール: info@minsai.org ホームページ: <http://www.minsai.org/>
振替口座: 00150-0-57664 (奨学生専用口座)
表紙: ラオス



ペンレン・セルランノン氏



サワンナケート教師養成短大

SPOT LIGHT

.....

村で初めて 少数民族出身の教師になりました

少数民族教師養成プロジェクトの元奨学生ペンレン・セルランノン氏（28歳）に会ってきました。セルランノン氏は同プロジェクトの奨学金を受けてサワンナケート教師養成短大を卒業。2008年から出身地のサワンナケート県アルロン村の小学校で教えています。

アルロン村はマコン族が住んでいる、電気もなく、外部の人間がほとんど来ない小さな山村です。セルランノン氏は同村でマコン族の言葉以外にあまり接することなく成長しました。しかし小学校に入学したら、授業はすべてラオス語なので一言もわからず、また先生もマコン族の言葉がわからず、授業についていくのが大変だったそうです（それで学校に通わなくなる子もいます）。ラオスには49の民族があり、ラオス語を母国語として使っているのは人口の半分です。テレビもなく外部との接触もない山間部に暮らす民族の子どもたちは、小学校でセルランノン氏と同じ辛い経験をします。努力家のセルランノン氏は必死で勉強し小学校を卒業。両親を説得して中学校に就学して往復8キロを毎日歩いて通いました。「勉強は楽しかったですよ」と語ります。

現在、セルランノン氏はアルロン村でちょっとした有名人です。それもそのはず、村出身者の教師がアルロン小学校で教えるのは、セルランノン氏が初めてだからです。言葉の壁が解消され、同校の生徒たちもセルランノン氏に質問できます。「教育の重要性について認識している村人はまだ少ないのが現状です。教師として子どもたちの役に立てて嬉しい」と照れながら話しました。



授業風景

お問い合わせ

教師養成短大で勉強するためには、授業料と寮での生活費を含めて年12万円かかります。ご寄付は1,000円からできます。2014年度のご支援の締め切りは6月14日です。詳細は担当：志賀まで（info@minsai.orgまたはTEL:03-6457-5782）